

特集 三木 靖先生を偲ぶ

研究者 三木 靖先生を偲ぶ

鐘ヶ江 賢二¹⁾

1) 鹿児島国際大学国際文化学部博物館実習施設

1. 研究者・三木 靖先生

鹿児島国際大学短期大学部の名誉教授で、城郭研究の第一人者であった三木靖氏が2023年11月17日に逝去された。三木先生は、鹿児島国際大学博物館実習施設（鹿児島国際大学ミュージアム）刊行の報告書にも多数論考を寄稿され、また施設主催の特別企画展やワークショップなどのイベント開催にも協力していただいた。三木先生のご活躍と実績は、数多くの著作とともに、本施設で刊行した報告書をご覧いただければ、ご理解いただけると思う。

三木先生は、中世から近世の城郭研究を長く牽引され、文化財の調査、整備および活用にも深くかかわり、専門的な見地に基づく指導を各地で行われた。また学界での活躍だけでなく、一般向けの山城歩きのイベント、文化財の保存・活用の啓発活動も積極的に企画され、教育普及活動にも尽力された。三木先生を慕う歴史ファンの方々が、先生の軽やかな足取りを追って山城の踏査に向かう姿は、先生が出席されるイベントでは恒例の風景となっていた。また鹿児島短期大学および本学短期大学部時代の教え子の方々が、先生を慕いイベントのお手伝いをされている光景もよく見かけた。先生の城郭研究を牽引するひたむきな姿が、多くの人々を引き付けたのだらうと思われた。

一方、日頃先生と接してきた筆者の印象としては、先生は研究者としての自負を強く持っておられ、研究者としての信念や探求心を大切にしていたように感じた。現在、鹿児島市の鹿児島城は国史跡の指定答申を受け、城下だけでなく背後の城山（現在の城山ホテル鹿児島が位置する丘陵地一帯）を含めて一体的に理解すべきという理解が定着している。従来は、城下の麓にばかり目が行きがちで、城の防御に欠かせない背後の山城の意義について十分に議論が尽くされていない状況に対して、先生は鋭く問題提起されていた。中世以来の山城である城山一帯（上山城跡）と麓



三木 靖 鹿児島国際大学短期大学部名誉教授
(1937-2023)

を含めて鹿児島城として国史跡に指定答申を受けたことで、長年の研究に裏付けられた先生の主張が、結実したのではないかと考える。

三木先生は、フィールドでの調査を重視されており、鹿児島県内の中世山城の踏査にも何度か同行させていただいた。険しい山道を軽々と進む先生の健脚にも驚かされたが、先生の山城に対する鋭い視線や、フィールドでの洞察力には感服させられることが多かった。先生のフィールドに基づく確かな見解が、山城の調査整備にかかわる各市町村の文化財担当者との信頼関係の構築につながったのではと考える。先生の研究は、こうした地道なフィールドワークの蓄積と、各市町村の文化財担当者との山城調査を通じたネットワークに支えられていたのだらう。

本稿では、三木先生の業績を改めて振り返り、本施設に寄稿された論文や短報について概要を紹介することにした。そして筆者は2007年ごろ、企画展開催の準備のために先生と協議する中で、「三木 靖の略歴と論考（2007年2月現在での未完のメモ）」の提供を受けた。この資料は、2007年までの先生の長年にわたる活動の足跡がよくまとめられており、先生の研究を参照し渉猟する際に役立つ内容を含んでいると考えた。そこで、「三木 靖の略歴と論考（2007年2月現在での未完のメモ）」のうち、先生の研究に関する内容を抜粋して本稿で紹介する。

2. 鹿児島国際大学博物館実習施設刊行報告書中に掲載された論考

(1) 鹿児島国際大学考古学ミュージアム調査研究報告 7 2010. 3

「薩摩国安養寺城（鉢巻城）の調査資料」

薩摩川内市安養寺城の縄張図、遺構写真の紹介。

(2) 鹿児島国際大学考古学ミュージアム調査研究報告 8 2011. 3

「大隅国建昌城をめぐる」

縄張の要素から始良市建昌城の構造をまとめ、文献資料や発掘調査成果から城の変遷をたどる。また調査や活用、保存と、行政機関による本格的な取り組みがなされている城である点も注目すべきと主張。

(3) 鹿児島国際大学考古学ミュージアム調査研究報告 9 2012. 3

「屋久島・口永良部島の城の調査」

大隅諸島の屋久島および口永良部島の山城の縄張り調査、発掘調査の意義、縄張図の紹介。

(4) 鹿児島国際大学考古学ミュージアム調査研究報告 10 2013. 3

「薩摩国向山城の謎」

薩摩川内市向山城について、石材を多く使うなどの特徴から、城の評価について問題提起。

(5) 鹿児島国際大学考古学ミュージアム調査研究報告 11 2014. 3

「島津藩の本城としての鹿児島城」

鹿児島城の形成期・藩政前期・藩政後期・廃城期の変遷を絵図から追う。山城部と平城部の機能に着目。鹿児島城は簡素な作りながら、藩の権威の維持に役立つ。

(6) 鹿児島国際大学考古学ミュージアム調査研究報告 13 2014. 3

「史料紹介；成尾常矩「鹿児島城屋形及び周辺図」」

成尾常矩筆「鹿児島城屋形及び周辺図」の検討。鹿児島城の山城と平城の併置という観点から見直す論考。

(7) 鹿児島国際大学考古学ミュージアム調査研究報告 14 2017. 3

「甲良家文書の能舞台・橋掛」

鹿児島城跡の発掘調査では、能舞台とみられる遺構が検出されている。島津藩においても、能が重要視されていたが、鹿児島城の能舞台は江戸城との関連も無視できない。甲良家文書に記録されている江戸城本丸の能舞台と橋掛の図を紹介。

(8) 鹿児島国際大学ミュージアム調査研究報告 15 2018. 3

「古絵図等に見える鹿児島城」

山城と屋形からなる鹿児島城について、前期から廃城までその変遷を絵図からたどる。絵図による詳細な城の構造の検討。

(9) 鹿児島国際大学ミュージアム調査研究報告 16 2019. 3

「薩摩御城下絵図」

鹿児島県立図書館所蔵の薩藩御城下絵図を紹介。鹿児島城・大口城・出水城・加治木城・伊集院城・高城の絵図を収録。

(10) 鹿児島国際大学ミュージアム調査研究報告 17 2020. 3

「鹿児島城御楼門の歴史性と復元の経過—御楼門の瓦葺き終了に際して—」

鹿児島城の御楼門の復元の過程を解説。伝統的な建築法と最新の研究成果を駆使して御楼門復元が可能となった。

(11) 鹿児島国際大学ミュージアム調査研究報告 18 2021. 3

「鹿児島城築城と御楼門—上山城と鹿児島城の歩みに探る—」

鹿児島城御楼門の構造と変遷を絵図などから論じる。鹿児島城の山城部である上山城の意義についても議論し、鹿児島城の魅力ある実像を描くことを期待。

(12) 鹿児島国際大学ミュージアム調査研究報告 19 2022. 3

「鹿児島城の面影をたどる」

鹿児島城の曲輪および出入り口の構造を示す絵図などから、鹿児島城の面影をたどる。

3. 特別企画展（鹿児島国際大学博物館実習施設）における企画・監修

2009年11月 「南九州の中世山城の世界」

2014年4月 「鹿児島城築城への道のり—城からみた中世・近世—」

4. 講演会・ワークショップ（鹿児島国際大学博物館実習施設）

2009年11月15日 「中世山城の世界を体験してみよう」

2014年2月8日 「山城の保存・活用とまちづくり」

5. 「三木 靖の略歴と論考（2007年2月現在での未完のメモ）」（一部の誤字の修正を除き、研究業績に関する部分を原文のまま掲載）

学歴

昭和33年4月 早稲田大学第一文学部史学科国史専修入学

昭和37年3月 同上卒業

昭和37年4月 早稲田大学大学院文学研究科日本史専修入学

昭和40年3月 同上修了（文学修士）

（1）著書

『荘園史資料』（共著）校倉書房 1969年4月

『徳之島町史』（共著）徳之島町 1970年3月

『薩摩島津氏』新文物往来社 1972年6月

『日本城郭体系 18 鹿児島県』（編共著）新人物往来社 1979年9月

『鹿児島大百科事典』（項目編集委員・共著）南日本新聞社 1981年9月

『荘園絵図研究』（共著）東京堂出版 1982年9月

『角川日本地名大辞典 46 鹿児島県』（編共著）角川書店 1983年3月

『上屋久町郷土誌』（監修・編共著）上屋久町 1984年3月

『島津義弘のすべて』（編共著）新人物往来社 1986年7月

『南北朝の内乱』（共著）第一法規 1988年6月

『古文書の語る日本史 5 戦国織豊』（共著）筑摩書房 1989年9月

『人物でたどる日本荘園史』（共著）東京堂出版 1990年2月

『吉田町郷土誌』（共著）吉田町 1991年3月

『蘇る日向国都於郡城』日本ナショナルトラスト 1992年3月

『日本史大辞典』（共著）平凡社 1994年5月

『角川日本姓氏歴史人物大辞典 46 鹿児島県姓氏家系大辞典』（編共著）角川書店 1994年11月

『クロニク戦国全史』（編共著）講談社 1995年12月

『日本荘園史辞典』（共著）東京堂出版 1996年7月

『鹿児島の歴史』（編共著）高城書房 1997年5月

日本歴史地名体系 47 『鹿児島の地名』（編共著）平凡社 1998年7月

『尚古集成館 講座・講演集 36 戦国の城の魅力』尚古集成館

『歴史を知る』（共著）リブリオ出版 1999年12月

『乱世を生きる—島津豊久の生涯—』（監修）島津豊久公顕彰会 2000年9月

『伊集院町誌』（編共著）伊集院町 2002年3月

『吹上郷土誌通史編 1』（編共著）吹上町 2003年3月

『薩摩と出水街道』（編共著）吉川弘文館 2003年7月

『東市来町誌』（監修）東市来町 2005年4月

『郡山郷土誌』（編共著）鹿児島市 2006年3月

（2）論文

（A）中世史・近世史関係

備後国地比庄・藤原姓山内氏一族一揆（鹿児島短期大学『研究紀要』1 1968年3月）

荘園体制における領主と合戦—三河国を中心にして—（鹿児島短期大学『研究紀要』5 1970年3月）

南北朝内乱期の一揆—太平記を中心に—（日本歴史学会『日本歴史』276 1971年5月）

戦国時代の合戦についての一考察（鹿児島短期大学『研究紀要』9 1972年3月）

荘園体制下の畑作の実態についての一考察（鹿児島短期大学『研究紀要』16 1975年10月）

戦国大名大友氏関係古文書について—堤家文書の紹介を中心に—（鹿児島短期大学『研究紀要』29 1982年3月）

庄内合戦について（『南日本文化 特集号庄内の乱』南九州文化研究会 1989年6月）

将軍吉宗の素顔（鹿児島県立図書館教養講座要旨『芸香草 16』鹿児島県立図書館 1997年3月 『歴史を知る』リブリオ出版 1999年12月）

（B）南西諸島関係

- 楠川区有文書目録（共著・南日本文化研究所紀要『南日本文化』1 1969年1月）
- 南種子町中之崎，西村時安供養塔をめぐって（南日本文化研究所紀要『南日本文化』2 1969年7月）
- 徳之島の古代，中世（『徳之島町誌』同町刊 1970年3月）
- 和泊町中央公民館保管の沖家文書について（南日本文化研究所報『薩琉文化』1-4 1971年10月）
- 伊地知季安と栗原信充—沖家文書の紹介—（南日本文化研究所紀要『南日本文化』5 1972年8月）
- 喜界島と島津藩政（南日本文化研究所紀要『南日本文化』6 1973年10月）
- 奄美の中世，近世（『奄美文化史』西日本新聞社 1974年10月）
- 南島文化論序説（南日本文化研究所報『薩琉文化』15 1980年3月）
- 沖永良部島の山城（南日本文化研究所報『薩琉文化』20 1983年3月）
- 屋久島の歴史（『上屋久町郷土誌』同町 1984年3月）
- 住用町の文化財（南日本文化研究所紀要『南日本文化』20 1988年3月）
- 沖永良部島・和泊町の文化財アンケート集計報告（南日本文化研究所紀要『南日本文化』23 1991年3月）
- 徳之島町の文化財に関する調査報告（南日本文化研究所紀要『南日本文化』25 1992年8月）
- 与名間の小字地名についての資料紹介（南日本文化研究所紀要『南日本文化』26 1993年8月）
- 奄美大島喜界町の文化財調査報告（南日本文化研究所紀要『南日本文化』28 1995年11月）
- 種子島中種子町の文化財調査報告（南日本文化研究所紀要『南日本文化』32 1999年8月）
- 種子島西之表市の文化財調査報告（南日本文化研究所紀要『南日本文化』33 2000年10月）
- (C) 島津氏関係**
- 島津藩版について（鹿児島短期大学『研究紀要』13 1974年3月）
- 島津義弘<戦場に生きる豪将>（『別冊歴史読本 戦国武将 207傑』新人物往来社 1977年4月）
- 島津忠良の生死観（『戦国の風雲』毎日新聞社 1979年3月）
- 島津継豊と瑞仙院（『別冊歴史読本 徳川 300藩血族総覧』新人物往来社 1983年10月）
- 島津氏（『別冊歴史読本臨時増刊 戦国大名家 370出自辞典』新人物往来社 1984年3月）
- 戦国大名島津氏（『戦国大名系譜人名辞典 西国編』新人物往来社 1985年11月）
- 『島津義弘のすべて』（編集・分担執筆，新人物往来社 1986年7月）
- 島津義弘と家督継承（上）（鹿児島短期大学『研究紀要』38 1986年10月）
- 島津義弘と家督継承（中）（鹿児島短期大学『研究紀要』39 1987年3月）
- 守護家島津氏（『室町幕府守護家事典 下』新人物往来社 1988年11月）
- 島津義久（『別冊歴史読本 作戦研究戦国の籠城戦』新人物往来社 1989年1月）
- 島津氏（『日本の名族 12 九州編』新人物往来社 1989年10月）
- 戦国島津氏と庄内の乱（南九州文化研究会『南九州文化』41 1989年10月）
- ドキュメント大名行列 薩摩藩（『歴史読本 12 参勤交代のすべて』新人物往来社 1989年12月）
- 島津義弘と家督継承（下）（鹿児島短期大学『研究紀要』45 1990年3月）
- 島津国史（事典シリーズ『日本歴史「古典籍」総覧』新人物往来社 1990年4月）
- 島津軍団（『別冊歴史読本 作戦研究戦国の奇襲戦』新人物往来社 1990年8月）
- 島津連合軍（『別冊歴史読本 作戦研究戦国の攻城戦』新人物往来社 1990年9月）
- 島津義弘—その経済政策と経済力（事典シリーズ 13『日本史「戦国」総覧』新人物往来社 1992年1月）
- 薩摩藩島津重豪・徳田大兵衛・調所広郷（『江戸 300藩有名殿様と名物家臣』新人物往来社 1992年7月）
- 島津藩の海外貿易（『歴史と文学の回廊 第14回南九州沖縄』ぎょうせい 1992年11月）
- 『上井覚兼日記』の酒と茶（事典シリーズ 17『たべもの日本史総覧』新人物往来社 1993年1月）
- 島津氏の戦国時代（『鹿児島県風土記』旺文社 1995年11月）
- 島津氏（『戦国大名閥閥事典 第3巻』新人物往来社 1997年1月）
- 戦国大名をとりこにした南蛮文化—76万信者はいかにして入信したか（『戦国群像シリーズ 51 戦国合戦大全 下巻』学研 1997年8月）
- 薩摩・大隅・日向国守護島津氏（『歴史と旅 守護大名と

- 戦国大名』秋田書店 1997年9月)
- 島津義弘と関ヶ原合戦退き口(『季刊歴史海流 ピンチからの脱出』海越出版社 1998年7月)
- 大隅合戦・義弘は島津当主になっていない(歴史群像シリーズ『裂帛島津戦記』学研 2001年8月)
- 島津氏と鹿児島への関わり1～6(鹿児島地域経済研究所『地域経済情報』144～156 2002年3月～2003年3月)
- 島津藩の外城と麓(『城郭陣屋要害台場事典』東京堂 2002年7月)
- 島津義弘研究最前線(『歴史読本6 書き換えられた戦国時代の謎』新人物往来社 2006年6月)
- 島津義弘の生涯(始良市歴史民俗資料館開館20周年記念特別展図録『戦国武将島津義弘』2006年10月)
- (D) 鹿児島城の城郭関係**
- 吉田松尾城の研究(鹿児島短期大学『研究紀要』30 1982年11月)
- 大口城跡の絵図と縄張図(鹿児島短期大学『研究紀要』31 1983年3月)
- 谷山郡山田と苦辛城(鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書27『苦辛城跡』1983年3月)
- 沖永良部島の山城(南日本文化研究所報『薩琉文化』20 1983年3月)
- 文献にみる平山城(川辺町埋蔵文化財報告書1『平山城跡』1984年3月)
- 龍郷町のグスク関係調査の概要(南日本文化研究所報『薩琉文化』23 1984年12月)
- 戦国期の高山城(『史跡高山城跡保存管理計画策定報告書』高山町 1985年3月)
- 大隅国肝付郡高山城の変遷(上)(鹿児島短期大学『研究紀要』36 1985年10月)
- 大隅国肝付郡高山城の変遷(下)(鹿児島短期大学『研究紀要』37 1986年3月)
- 研究資料よりみた鹿児島県の中世城館跡(『鹿児島県の中世城館跡』鹿児島県教育委員会 1987年3月)
- 一字治城の縄張について(伊集院町埋蔵文化財調査報告書4『一字治城跡』1990年3月)
- 一字治城縄張の研究(鹿児島短期大学『研究紀要』46 1990年1月)
- 上妻家の城郭図について(『西南日本の歴史と民俗』第一書房 1990年9月)
- 谷山地区の中世城館と弓場城跡(鹿児島市埋蔵文化財調査報告書11『谷山弓場城跡 上巻』1992年2月)
- 知覧城の縄張の研究序説(知覧町文化財調査報告書3『知覧城跡』1992年3月)
- 日向国志布志城縄張の研究(鹿児島短期大学『研究紀要』50 1992年10月)
- 薩摩国伊作城の縄張(鹿児島短期大学『研究紀要』51 1993年3月)
- 奄美におけるグスク調査の報告書(南日本文化研究所叢書18『奄美学術調査記念論文集』1993年3月)
- 牟礼ヶ城の縄張について(金峰町埋蔵文化財発掘調査報告書4『牟礼ヶ城跡』1993年6月)
- 薩摩国清敷城の縄張研究序説(鹿児島短期大学『研究紀要』53 1994年3月)
- 鹿児島の中世山城(鹿児島県考古学会『鹿児島考古』28 1994年7月)
- 大口曾木、関白陣の研究(鹿児島短期大学『研究紀要』54 1994年12月)
- 薩摩島津氏一発祥の島津荘と広がりゆく城郭群(『歴史と旅』6 秋田書店 1996年3月)
- 申木野城の特徴(申木野郷土研究会『くしきの』10 1996年6月)
- 鹿児島の中世城郭について(一)(鹿児島短期大学『研究紀要』57 1996年7月)
- 屋久島における中世城郭の研究(南日本文化研究所紀要『南日本文化』29 1996年9月)
- 薩摩国向山城の縄張について(入来町埋蔵文化財発掘調査報告書7『向山寿昌寺峯陣跡』1997年2月)
- 鹿児島の中世城郭(『鹿児島の歴史』高城書房 1997年2月)
- 川辺の中世城郭をめぐって(『川辺町郷土史追録』1997年3月)
- 薩摩国向山城の研究(鹿児島短期大学『研究紀要』60 1997年6月)
- 屋久島における中世城郭の研究—縄張図を主として—(南日本文化研究所紀要『南日本文化』31 1998年8月)
- かごしま城郭散歩(『鹿児島新報』1999年 年間日曜連載)
- 薩摩国申木野城跡(鹿児島県教育委員会『鹿児島県文化財調査報告書』45 1999年3月)
- 薩摩国伊作城の縄張図について(吹上町埋蔵文化財発掘調査報告書13『亀丸城跡』1999年3月)
- 松尾城跡について(出水市埋蔵文化財発掘調査報告書10『松尾城跡』1999年3月)
- 戦国の城の魅力(『尚古集成館 講座・講演集』尚古集成

- 館 1999年3月)
- 薩摩島津氏一発祥の島津荘と広がりゆく城郭群 (『歴史と旅』6 秋田書店 1999年6月)
- 奄美の中世城郭について (南九州城郭談話会紀要『南九州城郭研究』1 1999年6月)
- 続かごしま城郭散歩 (『鹿児島新報』2000年 年間日曜連載)
- 薩摩国の中世城郭研究Ⅰ (鹿児島短期大学『研究紀要』67 2000年11月)
- 中世城郭と住民 (南九州城郭談話会紀要『南九州城郭研究』2 2000年11月)
- 薩摩国の中世城郭研究Ⅱ (鹿児島国際大学短期大学部『研究紀要』68 2001年11月)
- 奄美の中世城郭 (鹿児島国際大学付属地域総合研究所『南日本文化』34 2002年3月)
- 薩摩国の中世城郭研究Ⅲ (鹿児島短期大学『研究紀要』69 2002年7月)
- 鹿児島のの中世城郭 (鹿児島県教育委員会『かごしま文化財事典』2002年3月)
- 伊集院町の中世 (伊集院町誌編さん委員会『伊集院町誌』2002年3月)
- 親子で歩いた山城跡 (鹿児島県青少年育成県民会議『せつべとべ』2002年6月)
- 薩摩国の中世城郭研究Ⅳ (鹿児島短期大学『研究紀要』70 2002年11月)
- 徳之島の城郭についての資料 (鹿児島国際大学付属地域総合研究所『南日本文化』35 2003年3月)
- 薩摩国清色城の縄張について (鹿児島国際大学付属地域総合研究所『地域総合研究』32-1 2004年6月)
- 薩摩国清色城の「縄張図」 (南九州城郭談話会紀要『南九州城郭研究』3 2005年7月)
- 薩摩国穎娃城跡の調査報告 (鹿児島県教育委員会『鹿児島県文化財調査報告書』51集 2005年3月)
- (E) 鹿児島関係**
- 禰寝文書永和三年十月二十八日一揆契約状の問題点 (鹿児島中世史研究会『会報』26 1969年7月)
- 薩摩国伊作荘庄内日置北郷下地中分絵図の問題点 (鹿児島短期大学『研究紀要』7 1971年3月)
- 志布志町調査概報 (南日本文化研究所報『薩琉文化』6 1976年3月)
- 志布志湾域7町の文化財保存関係条例 (南日本文化研究所紀要『南日本文化』10 1977年7月)
- 志布志湾域における文化財の保護に関する意向 (南日本文化研究所紀要『南日本文化』11 1978年12月)
- 鹿児島人国記・郷土の人物128人 (『歴史百科郷土人物事典』2-1 新人物往来社 1979年2月)
- 日本の代表地名2300 鹿児島県 (『歴史百科郷土人物事典』2-2 新人物往来社 1979年5月)
- 鎌倉期の所務相論の性格 (鹿児島短期大学『研究紀要』28 1981年11月)
- 外城体制と郷中制度-強藩を支えた藩政の二本柱 (歴史群像シリーズ16『西郷隆盛』学研 1990年1月)
- 古代中世近世の吉田 (『吉田町郷土誌』1991年3月)
- 中世の薩摩-戦国期の薩摩の古道 (歴史の旅調査報告書第1集『出水筋』鹿児島県教育委員会 1993年3月)
- 種子島銃の合戦での使用 (『鉄砲伝来450年図録』黎明館 1993年9月)
- 領民の疲弊と苦悩 (歴史群像シリーズ35『文禄・慶長の役』学研 1993年10月)
- 中世の大隅一室町・戦国期の大隅の古道 (歴史の道調査報告書第2集『大口筋・加久藤筋・日向筋』鹿児島県教育委員会 1994年3月)
- 田代町の文化財に関する調査報告 (南日本文化研究所叢書19『大隅南・北地域学術調査報告書』1994年3月)
- 阿多忠景・入来院定心 (『朝日歴史人物事典』朝日新聞社 1994年3月)
- 中世の海の道-一室町・戦国期の海の道 (歴史の道調査報告書第3集『海の道』鹿児島県教育委員会 1995年3月)
- 秀吉、北薩8か所に泊まる (わが郷土32『鹿児島新報』1995年4月)
- 中世後期の薩摩半島の街道-「道筋」及び城郭との関連 (歴史の道調査報告書第4集『南薩地域の道筋』鹿児島県教育委員会 1996年3月)
- 天下人秀吉と鹿児島 (『文化ジャーナル鹿児島』朝日印刷 1996年7月)
- 上野原遺跡 (鹿児島ユネスコ協会『鹿児島ユネスコだより』13 1997年10月)
- 鹿児島県内の文化財 (鹿児島県庁企画部地域政策課『鹿児島県景観形成基本計画』1998年3月)
- 日本の古代史を書き変える上野原遺跡 (『アルカス 98年8月号』日本エアシステム 1998年8月)
- ゴンザの時代 (ゴンザファンクラブ会報『ゴンザ』33 1999年7月)
- 川路利良と島津斉彬 (鹿児島県警察協会機関紙『さつま』

1999年8月)
 五代友厚(『薩摩の七傑』高城書房 2000年10月)
 桂庵玄樹の墓から(鹿児島県教育委員会『かごしまの教育』
 21 2000年12月)
 鹿児島に中世の遺産を探る(鹿児島国際大学生涯学習セン
 ター『2002年度特別講演会「鹿児島の埋もれた歴史遺
 産に光を」報告書』2003年3月)
 戦国時代の吹上(吹上郷土誌編纂委員会『吹上郷土誌通史
 編1』2003年3月)
 『薩摩と出水街道』(街道の日本史54 編共著 吉川弘文
 館 2003年7月)
 鹿児島の歴史と文化を考える一『三国名勝図会』を手がか
 りに一(鹿児島国際大学生涯学習センター『2003年度
 特別講演会「鹿児島の埋もれた歴史遺産に光を」報告書』
 2004年3月)
 島津家文書を歩く「山ヶ野金山跡」(横川町史談会『横川
 史談』14 2004年3月)
 日向国志布志城の城の変遷と縄張(志布志町教育委員会『志
 布志城跡関係資料集I』 2005年3月)
 市町村合併と歴史遺産(鹿児島国際大学生涯学習センター
 『2004年度特別講演会「鹿児島の埋もれた歴史遺産に光
 を」報告書』 2005年3月)
 薩摩国亀井山城の縄張研究序説(鹿児島国際大学短期大学
 部『研究紀要』75 2005年3月)
 東市来町の中世(東市来町誌執筆編さん委員会『東市来町
 誌』監修 2005年4月)
 満家院の中世(郡山郷土誌編纂委員会『郡山郷土誌』
 2006年3月)
 日置北郷下地中分関係遺跡(鹿児島県教育委員会『鹿児島
 県文化財調査報告書』第52集 2006年3月)
 消えた寺院の復元, 説明, 実写鹿児島・資料(鹿児島国際
 大学生涯学習センター『2005年度特別講演会「鹿児島
 の埋もれた歴史遺産に光を」報告書』 2006年3月)
 講演会「鹿児島の埋もれた歴史遺産に光を」報告書 2006
 年3月
 満家院の中世, 川田義朗(『郡山郷土誌』鹿児島市 2006
 年3月)
(F) 九州関係等
 戦国大名大友氏関係古文書について一堤家文書の紹介を中
 に一(鹿児島短期大学『研究紀要』29 1983年3月)
 筑後川の合戦(『戦乱の日本史5 南北朝内乱』第一法規
 1988年6月)

九州大名とキリスト教(『古文書の語る日本史 第5巻戦
 国・織豊』筑摩書房 1089年5月)
 多々良浜の戦い(『南北朝の争乱』学研 1991年2月)
 応仁の乱一九州 大内氏, 大友氏, 少弐氏三つ巴の抗争(歴
 史群像シリーズ37『応仁の乱』学研 1994年3月)
 名護屋城・秋月城・門司城・立花城・高城(『戦国の城一
 実戦データファイル』新人物往来社 1995年11月)
 豊臣秀吉合戦総覧・九州平定(『豊臣秀吉合戦総覧』新入
 物往来社 1996年9月)
 田手綴の戦い・勢場ヶ原の戦い・耳川の戦い・沖田綴の戦
 い(入門シリーズ『戦国合戦「古記録・古文書」総覧』
 新人物往来社 1999年3月)
 信長・秀吉と「南蛮文化」の開花(『再現日本史 織豊3』
 講談社 2001年9月)
 戦国大名島津氏の動向と北部九州(鳥栖市教育委員会『鳥
 栖の中世V』 2004年3月)

(G) その他の分野関係

父親について(鹿児島短期大学同窓会会報『もくれん』
 11 1992年11月)
 中世の山城と危機管理(鹿児島県総合研究教育センター『教
 育研究』113 1997年6月)
 本研究所顧問故竹内理三氏の生涯と業績(南日本文化研究
 所紀要『南日本文化』30 1997年8月)
 高校大学一貫校の推進に期待(『全私学新聞』論壇1715号
 1999年12月23日)
 21世紀の鹿児島への貢献を期待する(鹿児島市『新成人
 の君へ』 2000年1月)
 私が感じる「男女共同参画社会」(鹿児島市女性政策課『す
 てっぶ』10 2000年3月)
 短期大学-高等教育のグランドステージ(日短協機関誌『短
 期大学教育』56 2000年4月)

おわりに

以上, 三木先生の業績を紹介した。長年にわたる三木先
 生の研究の蓄積が, 今後も南九州城郭研究の指針として活
 用されることを期待したい。三木先生に最後にお会いした
 のは, 2023年の夏で, いつものようにふらっと博物館実
 習室に顔を出された。そして, 鹿児島城に関連するイベン
 トをぜひ本施設で企画してほしい, とリクエストをいただ
 き, それを受けて構想を練っていたが, 先生と実施するこ
 とはかなわなくなってしまった。先生とお会いし議論する
 こともできないと思うと, 寂しさはぬぐえないが, きっと

天国でも全国津々浦々で山城歩きを続けておられるのだら
うと思う。いつか再び山城歩きをご一緒できたらと考えて
いる。

心よりご冥福をお祈りします。